

## 青森県におけるワライカモメの観察記録

吉岡俊朗

〒034-0021 青森県十和田市東二十三番町 24-1 ロイヤルパレスミュウ A 号

### はじめに

ワライカモメ *Larus atricilla* は北アメリカの東海岸地域、西インド諸島、ベネズエラからスリナムにかけての海岸地域で繁殖し、北アメリカ南部からペルー、チリ、ブラジル北部で越冬する (桐原ほか 2009)。

日本では 2000 年 6 月 26 日に東京都硫黄島にて未公認記録ではあるが 1 羽 (<http://nabeyoshi.blog95.fc2.com/blog-date-200702.html>) がはじめて発見、撮影された。続いて同年 9 月に愛知県豊橋市について成鳥冬羽 (桐原ほか 2009) が確認された。その他 2002 年 5 月に千葉県銚子市、9 月に東京都大田区など複数の観察例がある。最近では 2008 年 7 月 15 日に愛知県一色町で成鳥夏羽と考えられる個体が確認されている。

このように国内における観察例は複数あるものの、いずれも公式な記録として発表されておらず、日本鳥類目録改訂第 6 版 (日本鳥学会 2000) では本種を検討中の種として扱っており、観察記録の論文発表が待たれている。

筆者は 2010 年 5 月 29 日に、青森県東北町にある小川原湖の七戸川河口付近に形成されている中州にて本種の若鳥を発見、

同年の 7 月 5 日まで一週間おきに観察し、形態や行動について知見を得たのでここに報告する。

### 観察地および観察方法

本種を発見した地点は、東北町の小川原湖の南西岸付近に形成された中州 (40°44'42" N, 141°17'15" E) で、七戸川の河口に位置する。観察地点は中州より約 250m 離れた七戸川の左岸とした。中州の長さは約 50m、幅 10~20m で潮の満ち引きによりその形は変化した。中州の中心部には草丈 1.5m~2.0m 程のイネ科の植物が茂っており、辺縁は砂地で形成されていた。その他に河口付近には複数の小さな中州が形成されていた。

筆者らは、2010 年 5 月 29 日から終認日である 7 月 5 日まで週に 1 度ないしは 2 度、継続的に観察を行った。全観察日数は 10 日であり、終認以降も 7 月下旬まで週に一度現地にて探索を行った。観察地点と中州に距離があったので、観察には双眼望遠鏡 (30 倍) を使用し、併せてできるだけ写真による撮影を試みた。

### 結果及び考察

---

2011 年 2 月 28 日 受理

キーワード：ワライカモメ, 小川原湖, 6 月

## 1. 確認状況

5月29日、16時頃、中州で羽を休めていたユリカモメ大のカモメ類1個体を発見した。この個体は、嘴が黒く、頭部に黒い斑があった。双眼望遠鏡を用いて細部を観察したところ、この個体がワライカモメと考えられる特徴を有していることがわかった。

発見時、この中州にはユリカモメ *Chroicocephalus ridibundus* が8羽とウミネコ *L. crassirostris* が2羽、オオバン *Fulica atra* が2羽いた。本個体はユリカモメの群れの中におり、一方的にユリカモメを突いていた。トビ *Milvus migrans* やハヤブサ *Falco peregrinus* が飛来するとユリカモメの群れは飛び立つことがあったが本個体が飛ぶことはなかった。ユリカモメの群れの中にいることが多かったが独立した行動を見せていた。

17:20、ユリカモメの群れが飛び立つと同時に湖上を北東方向へ飛んでいき、その後見失い、この日はそれ以降、同地点にこの個体に戻ることは無かった。

翌日、05:20、同中州でユリカモメ1羽、ウミネコ4羽の中に混じってワライカモメ

1羽がいるのを再び確認した。この日は正午頃にはこの個体はいなくなっていた。

本種1個体（同一個体である根拠はないため、以降本種と記述する）は5月29日~7月5日に渡って複数回出現した。本種は、早朝や夕方には中州で観察されることが多く、日中は湖の中心部付近でユリカモメの群れに混じって飛んでいることが多かったように感じられた。

本種が採餌する際には中州の端から端まで早足で歩き回り、貝殻の様な物を突いたり、地面に落ちている物を啄んでいた。餌の種類は判別できなかった。また、本種は発見時には他のカモメと独立した行動を見せることが多かったが、日が経つにつれてユリカモメと共に行動する事が多くなっていったと感じられた。

7月5日早朝の確認（酒井 私信）を最後にして、本種は観察できなくなった。

## 2. 外部形態

観察および撮影した写真（図1）により明らかになった本種の形態は以下の通りであった。

発見時、本種をユリカモメと比較すると、同大またはユリカモメよりやや大型で、嘴が太く長いため、頭部が大きく見えた。制止時に本種は初列風切の後方への突出が大きいと、横長な体型に感じられ、ふしよはユリカモメよりかなり長かった。

嘴は上下共に暗赤色であり脚も黒色から暗赤色に見えた。

頭部の耳羽および後頭部には淡黒色の斑があり、前頸、胸から脇にかけて炭色味をおびており、この点はアメリカズグロカモメ *L. pipixcan* 冬羽とは異なっていた。眼の上下は白色の羽毛が三日月型に縁取られ、幅はユリカモメより大きいと同大に見えた。光彩は黒色であった。

腹、下腹、下尾筒、腰、上尾筒は白色であった。

尾羽は外側から2, 3, 4枚目に暗色斑があり、その他の羽は白色であった。



図1. 七戸川河口で観察されたワライカモメ  
(2010年6月6日 沼田昇氏撮影)



図2. 飛翔するワライカモメ  
(2010年6月6日 沼田昇氏撮影)

制止時、背、肩羽、小雨覆、中雨覆、大雨覆はセグロカモメ *L. argentatus* 成鳥と同程度の濃さの灰色であり、初列風切は黒褐色であった。

翼上面(図2)は初列中雨覆、次列雨覆にかけては灰色であり、小翼羽、初列大雨覆は茶褐色であった。初列風切のうちP1～5まで内弁が茶褐色、外弁が淡褐色であった。P6～10は黒褐色であり、羽先に白斑は見られなかった。次列風切も茶褐色であった。

以上の特徴から、本個体はワライカモメ第一回夏羽の特徴に一致しており(Olsen & Larsson 2004, 高野伸二ほか 2007, 氏原・氏原 2010), 第一回夏羽もしくは第一回冬羽で嘴が黒色で頭部が部分的に黒くなる類似種である, アメリカズグロカモメ, ズグロカモメ *Saundersilarus saundersi*, ヒメカモメ *L. minutus*, ボナパルトカモメ *L. Philadelphia*, クビワカモメ *L. sabini* などとは異なっていた。

日本における本種の観察例は10例程と少なく, 東北地方では初めての記録と考えられる。

しかし, 近年関東地方での観察例が増え, またオーストラリアなど南半球でも記録があるため, 今後も北アメリカ西岸から迷行する可能性があると考えられ, 飛来記録が増加する可能性が考えられる。

#### 謝辞

原稿の執筆にあたり, 青木桜氏, 酒井淳一氏, 沼田昇氏, また, 宮彰男氏を始めとする八戸野鳥の会の皆様には貴重な観察記録, 写真の提供に関して大変お世話になった。蛭名純一氏には写真提供の他, 本種をワライカモメであると確認して頂いた。三上かつら氏には文献の検索や論文作成に関してのアドバイスを頂いた。この場を借りてご支援いただいた方々に対し, 厚く御礼申し上げます。

#### 引用文献

桐原政志・山形則男・吉野俊幸. 2009. 日本の鳥 550水辺の鳥. 文一総合出版, 東京.

- 日本鳥学会. 2000. 日本鳥類目録改訂第6版. 日本鳥学会, 東京.
- Olsen, K. M. & Larsson, H. 2004. Gulls of North America, Europe, and Asia. Princeton University Press Princeton and Oxford, Italy
- 氏原巨雄・氏原道昭. 2010. カモメ識別ハンドブック 改訂版. 文一総合出版, 東京.
- 高野伸二. フィールドガイド日本の野鳥増補改訂版. 日本野鳥の会, 東京.

**The first record of Laughing Gull *Larus atricilla* in Aomori prefecture, northern Japan**

Toshiro Yoshioka  
24-1-A Higashi-23bancho, Towada, Aomori 034-0021, Japan